

209-65-1 (2)

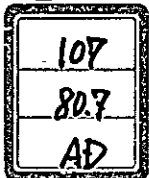
インド農業技術センターの活動状況



1965年 8 月

海外技術協力事業団

JICA



LIBRARY

国際協力事業団	
受入 月日 '85. 3. 23	107
登録No. 11175	80.7
	A7



インド農業センター要員を囲んで



写真左より 狩野, 田中, 西坂, 森上, 島田, 山田, 佐藤, 奥野 (敬称略)

出席者

西ベンガル州 ナディア農場:	(場長) 佐藤 幸平	(要員) 森下 重信
オリッサ州サンバルプール農場:	(場長) 島田 唯行	
アンドラプラデッシュ州パパトラ農場:	(要員) 西坂 照男	
マイソール州 マンディア農場:	(要員) 田中 春義	
マハラシュトラ州 コポリ農場:	(要員) 狩野 正次	
元インド大使館一等書記官 現山梨県経済部長:	山田 典男	
海外技術協力事業団:	奥野有志磨(海外センター課長)	
	安尾 正元(技術室)	

開会のあいさつ

奥野 本日は帰国早々でお疲れのところをお集りいただきましてありがとうございます。6人の方々、インド農業技術センター発足以来3年有余の間いろいろな困難を克服され、立派な成果をあげてこられました。インド側でも

このセンターの活動を高く評価した結果、追加農場設置の要請となって、新しく四農場がスタートしたわけで、これも皆さんの御努力の成果として敬服しております。本日は過去3年有余の間のいろいろの御経験や苦心談、また将来に対する抱負なども含めて、忌憚のないお話をうかがいたいと思います。

最初に佐藤さんから、インド農業技術センタ

一のこれまでの苦心談をお願いします。

農場運営苦心談

佐藤 それには技術的な面とそれ以外の面と二つの苦心があります。技術以外の面から申し上げますと、一つの農場で出身、経歴の違った人達が一緒に仕事をする場合、お互いにどうしたら気持をぴったり合わせることができるかということに一番苦労しておるわけでありました。そこで私は二つの点に留意しました。平等な立場で発言して、4人で納得したことはそれを守って実行すること。もう一つは、あまり大きい親切はとてできないが、つねにこまかい点に思いやりをつくすことである。例えば1人の要員が朝早く出て仕事を開始したという時には、自分はさしあたり緊急な用件がないとしても、やはりその人とある程度行動を共にするといったことです。それからインド人との関係でもやはりもしも利用価値があるものがあれば無条件で教えてやるとか彼等の業績にしてやるといった気持がインド人に対する思いやりとして必要であり、こういうことから好感を持つようになるのではないかと思います。

それから技術の教え方などは勿論基礎から順々に教えることは必要であるが、反面後進国の人達は最初から難かしいことを習いたがる傾向があります。そこで興味を起させる意味で、ありきたりのことをいう前に工夫して、むずかしいことを彼等にぶっつけ、驚異の気持をおこさせてから自分がやろうとするところを彼等に教えてゆくということも、一つの技術指導の手段ではないでしょうか。

次に技術的な面で苦心した点を申しますと、ジャングルに等しい荒地を開拓した経緯については、既に報告書で報告してありますので申し上げます。次のようなテストの結果を紹介します。

西ベンガル州でにボロ稲（乾季稲）には優良品種がなかった。すなわち粒数は多いが、成熟したものから先に落ちてしまう。それでアモン

稲の中の Latisail という品種が寒さに対して強いということと、光の感応性が強い、——つまり日の出から日没までの日の長さが毎日変ってゆくのだが、それに対して非常に敏感に働くことから、この品種を適期に播くと、ボロ稲と同じような生育経過をとって出穂するという事を見出して、実行しました。それが現在西ベンガル州の奨励事項になって、ボロ稲よりはアモン稲を、ボロ稲の時期に栽培するという技術が確立されたわけでありました。

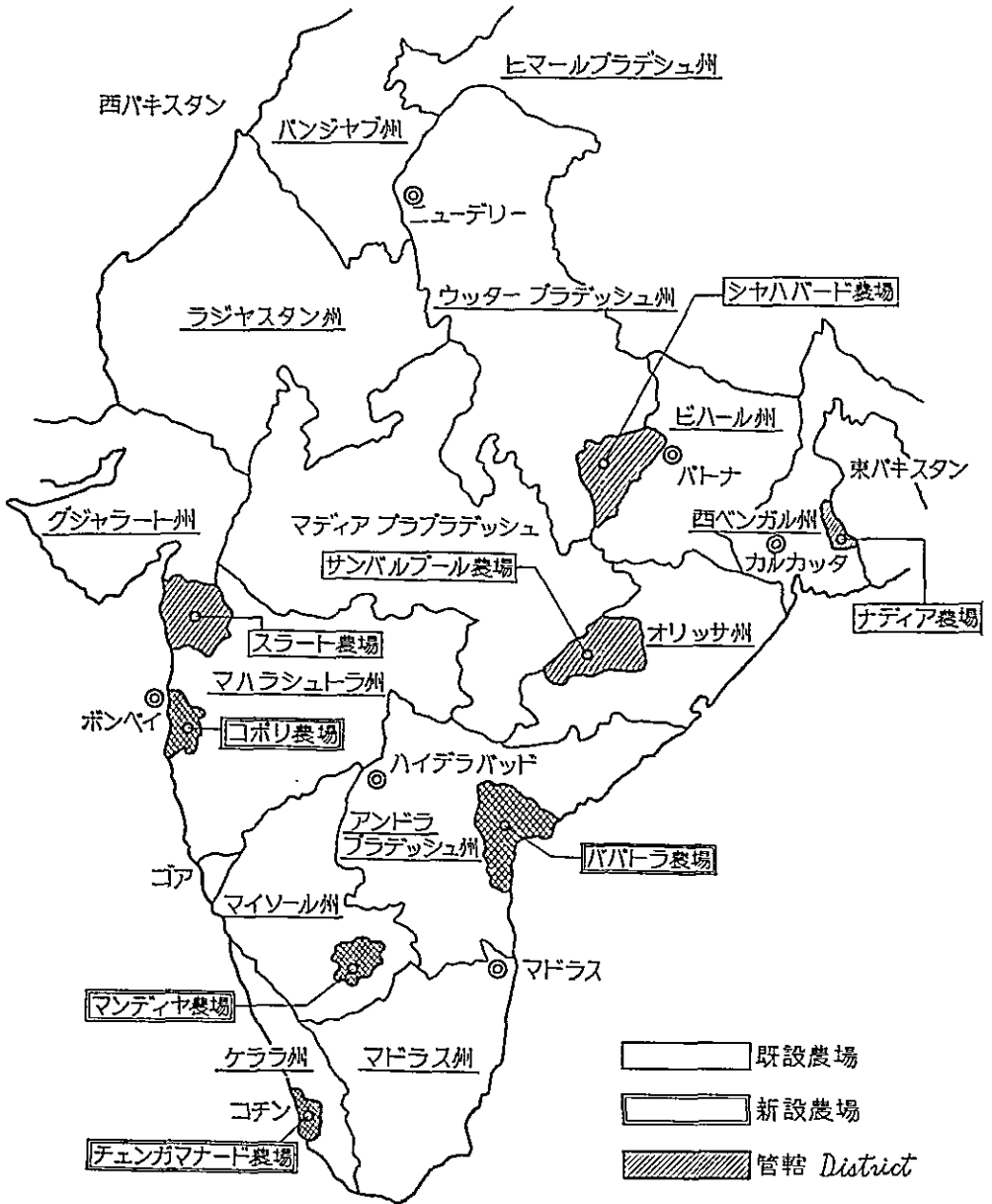
しかし今年の栽培では、1, 2, 3月は非常に低温でこの Latisail はなかなか穂が出なかった。そこで私はあきらめて鋤込んでしまおうという気持を一時おこしたが4月中旬から非常に高温になって、むしろ昨年以上の収量をあげることができ、やっと安心し自信をもつことができました。ここにいたるまでは、非常な苦心をしましたがその甲斐があったわけです。

それからもう一つの苦労は、西ベンガル州政府は、アウス稲の収量がアモン稲よりも高いので、アウス稲を栽培させたがっている。ところがアウス稲の収穫期が雨季に入る。丁度今頃ナディア農場ではアウス稲を刈取っているわけですが、この時期は大雨が多いために昨年などは夜の11時半頃まで稲かけをして働いたことがありました。というのは刈取ってから雨にぬれると、穂が発芽してしまうので、非常に短い間に沢山の仕事をしなければならぬわけで、アウス稲の収穫については非常に大きな苦労をしています。

それからもう一つナディア農場が忙しい原因は、アウス稲のあとにアモン稲を作付すれば2作は割合簡単にできるが、州政府あるいは篤農家などはさらに工夫して3作をやろうとしており、ナディア農場でもこれをこころみているため、3作を行なえばアモン稲で48マウンド、アウス稲で45マウンド、あと30マウンドもとれば目標の120マウンドの線を確保できるという皮算用ですが……。

奥野 サンバルプール農場ではどうでしょうか。

インド“農業技術センター 既設農場および新設農場設置場所



島田 私達の農場は試験研究の農場ではなく、模範農場ですので、やってみせるということがまず一番だろうということでやってみたわけです。農場の開設当時は、彼等は非常に階級制度が厳しく、土にまみれる者は下層階級の者であるという考えをもってまして、私達が耕耘機を使い、泥にまみれて働いていると、何だ日本人要員は農夫ではないかという見方を持っていたようでしたが、実際やっているうちに、非常に大事なことをやっているということを見直してきて、今では全然そういう偏見はなくなり、むしろ泥にまみれてやったからこそ今日の農場が出来たという見方に変ってきています。今迄いろいろな技術援助が行なわれているが、殆ど机上における技術援助であったり、或は遙かに高いところの技術援助であったということで、私達のやっているものは本当にインドに根をおろしたインドのためになるやり方であるという印象を持つようになったことは非常にうれしく思っています。そういう意味で実際耕作する農民との接触も多いという点も私達の農場の特徴であり、これが実の入った技術協力ではなからうかと考えています。

言葉の問題

安尾 インドは色々言葉がむずかしいと思うのですが。

島田 最初農場が発足した時は、私達は現地語は全然知らなかったが、それ以前に長い間インドの農業に尽くされたサンバルプール農場の方々が、1名ずつ各農場に配属されたので、その方達によって現地語が通じるようになったわけで、農場運営上大きな力になったと思います。

森下 はじめのうちは元サンバルプールにおられた田中さんに大変お世話になりましたが、田中さんが転出されてからは、私自身やらなければならないと考えるようになります。私は言葉を覚えるということは苦手だし、最初はよその国の言葉を習うのに苦手の抵抗があったが、やはり技術協力という建前上ある程度現地語を

しゃべらなければならないことがわかり、必要に応じて、若干ベンガル語を話せるようになった。農夫達も、現地語で話せばよく理解できると喜んでくれました。

当地区の農夫はヒンディー語を話すものもありますが、ほとんどベンガル語です。州自体プライドが強く、英語は相当高官でも余り話さない傾向があります。そういう具合で、現在なんとか言葉については不自由しません。

それからこれは言葉のことでありませんが、私はアメリカで働いた経験をもっていますが、アメリカ人は言ったことを実行するがインド人はそうはいかないから、こちらが誠心誠意、真剣にやっても素直についてこないの、この点、最初はインド人のペースに合わせながら最後はこちらのペースに巻いてしまうという方法に持っていくことが良いと考えるようになりました。

安尾 田中さんはベンガル語の権威だったのですが、南インドに行かれると言葉がまた違うのですが、その点どの位違うのですか。

田中 ベンガル語には自信がりましたが、マイソールに行くとき新しい要員の鈴木さん、鯉淵さんと全く同じ状態で、インドに8年間おっても南インドでは全然役に立ちません。そこにある鋏をちょっと持って来てくれと言ってもわからないし、こちらに来いと言うとむこうに走って行く。(笑) ついにかんしゃくをおこすと相手も感情を害するというわけで、言葉の問題は農業センターにおいては非常に重要です。

農業センター農場



加藤 狩野さんの場合は…。

狩野 スラート農場では要員赴任当初言葉や農業事情を覚えるために最初に武者修業を計画し、一人一人が順番で3等車で近くの農村を見学しました。又皆で旅行する時も、私はなるべくしゃべらないようにし、皆さんにやってもらいました。買物などほかの人にまかせると、2倍位費用がかかって損なんですけど、しかしそれで皆さんはヒンディー語をマスターされ、今では、演説が出来る位になりました。

西坂 当地区はテルグー語で、テルグー語の母語はサンスクリット語から来ており、ヒンディー語のつまったような単語になっているが、発音そのものを聞いていると大体は勘でわかります。ババトラ農場はファームマネージャー、カウンターパートはヒンディー語が通じるので、ファームマネージャーから労働者に命令しているので農場の仕事では苦勞していません。ただ現場で田植をやらせたりする時には、ちょっと言葉が通じません。

奥野 インド側の人達は英語はどうですか。

西坂 労働者の半分位まで簡単な英語はわかります。併しテルグー語そのものはサンスクリット語の詰まったものですから、ヒンディー語をごまかして早くしゃべればテルグーになる。(笑) 私は完全にはわからないが、大体通じるので、言葉で不自由した経験はあまりありません。

狩野 日本人もインド人もお互いに英語は外国語ですから完全な意思の疎通はできません。アメリカの平和部隊は各州ごとに州の言葉を訓練し、勉強しています。

田中 その問題は、我々がうかうかしていたらアメリカ人に負けてしまいます。我々の農場の隣にアメリカの平和部隊員一人が2年間派遣されており、養鶏・そ菜の指導をしていますけど、本国で徹底的にトレーニングを受けて、現地人と全く同じ生活をし、原地語をしゃべり、朝から晩まで農民と一緒にやっています。だから私達はしゃべれないのに、アメリカ人は原地語で話すのでちょっとひげめを感じます。

安尾 平和部隊の評判はどうですか。

狩野 個人的にはその周囲では非常に評判が良いが、平和部隊全般となると評判が良くないようです。

田中 農場のそばの普及員訓練センターの校長は、平和部隊の人達は、アメリカ人としての大國意識が強く、ここはインドだということを全然考えてくれないといっております。

森下 日本人には日本人のやり方があると思います。

インド人はとにかく口先だけで実際に働くことが不得意なようですので、お手本を見せてやるうとはり切ってやったわけです。

しかし、相手の事情も考えず、何でも自分のペースでするのも考えもので、或程度は相手のペースも考えて仕事をしなければなりません。といって余りペースを下げてゆくと彼等は逆に我々を見下げる傾向がありその辺のポイントのおき方がむずかしい。

奥野 余り彼等のことを思って下げ過ぎると主導権を失い、上げ過ぎるとアメリカ式にかけ離れ過ぎて、彼等を引張る力がなくなるということですね。

西坂 矢張りその辺が海外技術協力、とくに後進国に対する援助の問題では重要なポイントではないでしょうか。日本の考え方だけで進めてゆくと必ず失敗する。それで日本人のやり方とインド人のやり方とをどの程度のところで調節するかがむずかしい。

奥野 その国その土地によっていちがいは言えないでしょうが、ほかのセンターでも同じようなことがあります。しかもチームになると7~8名の要員がいてその中には強力に日本の立場を押しつけようとする人がおり、逆に相手側のことを考え、相手側は子供だから相手の身になって手を引張ってやるうというやり方をとる人がいます。こういった点では日本側要員同志の間で意見のくい違いもいろいろおこるようですが…。

森下 それは確かにそうです。日本から要員がセットされて来ているのならよいのですが、

九州から北海道の端まで、性格の違ったものが寄り合っ来ています。これらの要員を如何にしてまとめるかという技術がリーダーになかったら駄目です。稲作りの技術よりも人間作りの技術が大切で、立派な稲作りはその協力から生まれるものですから、理事長は大変御苦労だと思います。

山田 今、言葉の問題からいろいろ話がありました。確かに技術協力には言葉が重要な問題であることは自明の理だが、所が変わると言葉は通じなくなる。特に佐藤場長さんは、頭が堅くなって覚える気もないということだが、にも拘らず非常に評判が良い。これは何故かという、矢張り誠意だと思う。我々は東洋人のせいか、誠意をもってやれば通じるという感じを私自身も深くしています。英語がへたでも、誠意をもって当ってゆくと相当通じる。佐藤さんの場合、実際にその誠意が、働く場面に出てくるので、それを皆がわかってくれるということじゃないかと思えます。

品種の問題

安尾 スラート農場では、蓬萊米で多収穫をあげましたが、蓬萊米に対する州政府の意向はどうですか。

狩野 インド側は、よそから入ってきた品種に非常に反発するし、自分の作った品種でしたら早く奨励品種にします。しかし最近は為政者も変り、深刻な食糧不足が続いているので、蓬萊米に対し関心が向いてきました。

安尾 蓬萊米だと脱穀機を使わなければいけないので、州政府が蓬萊米を奨励すれば、脱穀機の需要がいちだんと高まりますね。

狩野 インドでも日本と合弁で、脱穀機などを作りたいという話はかなりありますが、現在のところまとまったという話は聞いておりません。

田中 マンディヤに新設農場が設けられましたが、作付計画の時に州の局長が来て、この州は非常な食糧難に陥っているから、質の面はぬ

きにして一番収量のある品種をやりたいから、そういう品種を選んでくれと言った。そこで日本で6カ月間研修を受けた育種の専門家が、台中65号が多収性があるので、圃場の半分位やってくれということでした。台中65号は将来優良品種に指定されるのではないかと思います。

山田 FAOなどでも蓬萊米というものに非常に関心を持っていることは事実でしょう。

狩野 市場で売っても、現在栽培している奨励品種と値段はそう変わりません。

奥野 ほかの州では蓬萊米に対する受入れ方はどうですか。

島田 サンバルプール農場の場合は、まだ日本種は入っていない段階で、今年になってやっと関心を持ちだしました。これから栽培してみるという段階です。

奥野 そうすると農場で作ったものに対する批判は。

島田 結局農場自体は、インドの環境に合わせて増産していこうということを主にして、インド人の好む米でより高い収量を上げていこうと努力してきたので、全部インドの奨励品種を使ってやっていました。今年あたりから蓬萊米も少しとり入れたいと思っています。

田中 マイソール州が何故最近ジャポニカ種に対して意欲をもやしているかという、コロンポプランで来日した研修員3名が、徹底的に日本びいきで、日本式稲作技術の導入に非常に熱心だからです。

佐藤 西ベンガル州の蓬萊米に対する関心は最近高まっています。私に台中ネイティブ1を作れというが、私はことわっています。と言いますのは、台中ネイティブ1は短程で、倒伏しない稲だという性質は認めるが、正常な稲とは考えられません。ベンガル州の現在の奨励品種の欠点を、この品種だけで改良しようという気持ちになれないからです。それよりは、現地の稲を作って、そこから良い稲を選んであげましょうと言って、台中ネイティブ1は否定しています。この品種は1種の奇形と思われ、出穂の工合が悪いのです。その性質を利用しろというな

ら話はわかりますが。品種改良については、まず研究機関でやってもらって、モデル農場に手数をかけないでくれと、お断りしております。

奥野 なぜそのような品種を向う側がすすめるのですか。

佐藤 何かカタックの試験場で、100マウンドとれたというので、中央政府の食糧大臣の推せんで西ベンガル州にそれを作れという命令が出たためらしいです。インド人は上からの命令は非常によく守るから、なんでもかんでもナディア農場で作らせようと考えたのでしょうが、私は研究機関でよく吟味してからやってくれと言っております。

山田 いずれにしても、良い性質を取入れて多収穫品種を導入してゆくということが必要なんでしょう。確かに先程お話にあったように、嗜好に合わないという点はあると思うが、嗜好と言ってもインド人の食生活を考えると半分は雑穀ですから、その残りが米と麦になっている状態で、段々生活程度が高くなれば、雑穀が米、小麦に変わって行くことでしょうし、このへんの検討も必要です。

狩野 蓬萊米がうまいとかうまくないとかいう人はそういう米を食べず、最高米を食べている上層階級の人です。

山田 そういう人は、ベラドン米を食っている。ベラドン米は相当日本米に近いともいえませう。

田中 西ベンガル州の、農村を回ってみると、盆・正月だけしか米を食べていない。毎日米を食べたくても買えないわけです。それだけ米の絶対量が足りないから、多収ということが先決問題じゃないでしょうか。常用している雑穀はダールという豆が主体です。

森下 うちの場合もいわれたように、稲だけの問題じゃないが、技術協力の本質から言えば、余り相手の言うことを早受けすると、失敗した時に、「日本から偉い人が来ているのにどうした」ということになりかねない。相手のいうことは、いちおう聞いてやり、そこに日本人の考えをしっかりとって、検討の上実施するように

している。ナディア農場は場長がそういう方針をとっているの、ある程度経費もかかるが、インド側は、全く文句を言わずについてきました。

佐藤 その一つの例としては、米のことはないが、今年の Dhaincha (緑肥) の栽培です。これは今迄平蒔きでやっていた為に湿害を受けて、生長がまばらであった。それを森下さんが畝立、広幅の栽培をしたところ非常によく出来た。発芽当時政府の高官が来た時は、これは経費がかかりすぎるからと非難していた。ところが、森下さんの工夫が報いられて、連中がびっくりする程の Dhaincha になり、普及用のスライドをつくるからと、写真をとりに来る次第です。結果だけ見て判断するので、むしろ良い点があります。

山田 現地の試験場とよく連絡をとらねばならないという話がありましたが、最終決定は農場自体でやらないといけなんでしょう。

西坂 バパトラ農場でも、あちこちから蓬萊米をやってみないかという声がかかっています。彼等としては、日本人のモデル農場を一生懸命利用したい訳です。新しいものは日本人に全部テストしてもらい、良かったら取り入れようとしています。蓬萊米は肥料をかかせませんから、葉の色も青くなり、虫がつき易い。そのうえ、バパトラ農場は螟虫が非常に多い所なので、その防除法に気をつけなければなりません。現在一番始めにやるべきことは、むしろ螟虫の防除法の確立だと思えます。そこで、バパトラ農場としては、各農場におけるテストの結果、適当な品種を教えてもらって、来年あたりから、小面積でも手をつけてみましょう。

島田 その点で今年の2月8日から11日までカタックの国立稲作試験場で、全インド稲作研究者大会があり、その時ダイレクターの要請があって私が出席しました。第1日目は品種のことで、全インドから集まった試験場長級の人が協議したが、品種改良で一番問題になったのは、如何に肥料をやることのできる品種を見出すかということにしばられました。そして結局蓬萊

米が、とくにマイソールの試験場から発表された台中65号が認められたようです。第1日は品種の問題に終わったが、蓬萊米の導入については、非常に興味をもっているのではないかという印象を受けました。

佐藤 台湾品種の感温・感光性の因子分析をどこかでやってもらおうと、おもしろいと思うのですが。

安尾 平塚の農技研遺伝科で遺伝因子の研究を進めているので、だんだんわかってくるでしょう。

島田 サンバルプール農場で、インドの品種を使ってどこまで増収できるかためています。10エーカーで大体45マウンドから50マウンドといったところです。よくインド人が60マウンドとれたと言うが、これは極く限られた小面積で、10エーカー平均50マウンドはとても無理だと思われまふ。私の農場でも今年は50マウンドの線ではないかと思っています。それ以上あげるためには、ほかの優良品種を使わなければならぬと考えています。

西坂 地区によって違いますが、うちの場合大学の専門家がやっていて、普通50マウンドとっています。同じインド品種でも地区、地区によって収量が全部違っているようです。オリッサは T141 が増収型で良い品種だが、あの土地では45マウンド止まりです。しかしバパトラに持って行ったらいくらかとれるかは別問題です。

今年は最初の年です。作付基準としては、下葉の枯れないような稲を作ってみようということで、基肥のチッソをおさえて、追肥をやっという計画をたてています。現在、大学では密植しているので下葉が枯れているが、うちの田んぼでは下葉が生き生きしている。今後生殖生長に入った時に、肥料をやってみようではないかという計画で、今やっています。同じ品種でも土地・気候条件によって増収に幅がある。現在大学あたりでやっているのは、最高62マウンド位までに達しているし、そういう点まだまだインドの品種でも望みはあります。これと平行して、良い品種を取入れて、全般的な

増収をあげてやるのが大事じゃないかと思っています。

肥料の問題

安尾 肥料の使用状況はどうでしょうか。一般農家に入っていますか。試験場では使うだろうけれども。

西坂 一般農民はまだチッソ位でしょう。特にバパトラの場合は、日本の尿素が入っていません。田植の基肥に尿素を使っています。私達の使っているのも、インドの農協から買ったものですが、日本のマークが入っています。

山田 日本の窒素肥料が良いということばかりかけています。第3次5カ年計画における農業増産のためのリーディングヒッターは肥料の増産で、それも窒素肥料ということなんです。ああいう大国になるとそれを運ぶ運賃が相当なコストになる。硫安は非常に運賃がかかる。尿素はチッソ含有率が高く、尿素が良いということになって、尿素、尿素とこの3年位さわいでいるようです。

島田 サンバルプールでは、パッケージ・プログラムで、肥料をずいぶん使っています。それで今年の稲に私は是非尿素を使いたいと思って購入方を依頼したが、何時も品切れで私達の農場には入りませんでした。

安尾 肥料を水稻に使っているのは東南アジアでは南ベトナムやインドの一部ぐらいで、あとはペイしないといってほとんど使っていません。しかし、コストは高くつかないと思う。増収で完全にペイするはずですよ。それが入ってゆかないのは色々阻害要因があるとは思いますが。

山田 一つはやはり耐肥性の問題もあるのじゃないですか。

安尾 一面水びたしになるので肥料をやりにくいということもあるでしょうが、アウスやボロ稲には基肥が流れ去るという心配は少ない。農民に必要性と経済効果を納得させる必要があるのでしょね。

こういった点、皆さんの農場の役割は大きいと思います。

事業団の大戸常務理事の考えでは、インドのパッケージプログラムは郡単位で、余りにも広すぎて、手が行き届かない。だから、インド農業センターのように、局所に必要な資材、人、肥料、農機具を無償でやって手厚いやり方で、次第に周辺に技術を浸透させてゆくやり方がよいのではないかとっております。肥料や農機具を大量にぼんとやるというやり方に比べると、一般受けはしないかも知れないが、地道な、インドと日本の両国にもっとも適した技術協力のあり方ではないかとも考えられます。

田中 マイソール州などは、西ベンガル州とは違って、堆肥を使う習慣が強い。あれだけの大木が生えていて、下に落葉や下草がない。ほとんどの田んぼに堆肥が入っている。そのように肥料を使うという観念が非常に強く、パッケージプログラムでは、肥料をいかにして他の州から分けて貰うかということに悩んでいるほどです。

山田 今安尾さんからお話があったが、農場に機械もやり肥料もやるというのはいいのだけれども、結局は一般農家に肥料・機械が普及されなければならない。これは贈与という訳にはゆかないので、買ってもらうねばなりません。日本でも売りたいのだが、むこうに外貨がないので。こういう問題が出てくるわけです。それならクレジットを設定してやらないかということをお分私どももやまして、やっと農機具、肥料はクレジットにのってきたのですが、農機具なんかクレジットの額が少ない。肥料のほうも相当やれると思っていたが、肥料業界には、いろいろの問題があって、インドにやるより中共にやらねばならぬとか、協定の関係で台湾を優先しなければならぬとかいうことで、仲々インドまで来なかった。日本の肥料は、白くて良いということになっていながら評判が良くない。こういう点は、日本として考えて行かねばならぬと思います。

佐藤 私が赴任したころは、ナディア農場附

近で、農民が肥料をやるのを見たことがなかった。それで本当に無関心なのか、或はやりたくてもやれないのか、どちらかと思っていた。ところが、ごく最近、ある一カ所で田植をする前に尿素を撒いていたわけです。「どうして尿素を撒くか」と言ったら、「あなた達日本人が肥料をやって良い稲を作っているから、私達も肥料をやって作ってみたいと思っている」とのことです。私は農民にも肥料をやれば良いということがわかってきたのだと思いました。その肥料の入手については、今年は早魃でジュートが極めて不作なので、西ベンガル州政府は中央政府に行つて尿素をもらってきた訳です。それをジュートに使うのを一部残して、田んぼのアモンの植付け前に撒いたのです。ジュートにやる尿素を、稲の方にさしむけようとする気持が芽生えてきたということは、面白い現象じゃないかと思ひます。

安尾 ジュートには必ず使っていますか。

佐藤 使っています。

山田 政府としては絶対量が足りないから、米は二の次で、ジュート・砂糖きびに優先的に肥料を配給するというのが、大体肥料の配分計画です。第3次5カ年計画が今年で終わりますが、肥料工業は5カ年間で35%位増産し、窒素肥料は自給できるように、工業生産力を高めることになっていけれども、どの程度目標を達成したかはわかりませんが、まだ出来ていないだろうと思ひます。

尿素なんかは、私の在勤当時にやっと入ってきた。肥料センターというものを日本の業界が作って、尿素でも使わしてみようじゃないかと言うと、農家は「貰っても、若し失敗したら困るからどうしても嫌だ」という。「マンゴーにまずやってみろ」というと、「いや、こんなに大きくなった木が、肥料のために駄目になったらとてもいかん。もし駄目になったら補償金を出すか」というわけです。それで「補償金をやるからやってみろ」ということで、やってみたら良かったわけです。そんなことを4～5年やって、尿素というものに対する認識が段々高ま

ってきたということはありません。

灌漑の問題

安尾 増収の大きな鍵になるものに、灌漑と肥料と農機具があると思うのです。どれも金のかかるものですが、灌漑ではカンボジアの Ho Tong Lip という農業技術研究所長をやっている人が「とにかく戦後の国際機関は、ダムを作れ、灌漑をやれと言ってダムばかり作る。しかし後進国ではダムをもて余している。というのは、水の利用はダムを作るよりはるかにむずかしいことだ。」とっています。

インドでもダムを作ったが、末端まで水が行かないので効果が挙っていないということも聞きますが。

山田 ここに二つの問題があります。一つは水を使うと経費がかかるので、水を買ってまで稲を作ることが出来ない。水をかけることによって増収すればペイするということがまだわからない。そこでこの農業センターに水を使えばペイするのだということを実証してくれということなのです。

第二の問題は、インドでは灌漑水路を作る場合、日本と違い主水路は国や州政府が作るのですが、主水路から各圃場にひく末端の水路は各農家が融資を貰って自分でやるという風になっているので、農民はゼニを借りてまで水路を作らない。主水路が流れているそばで、ざるで水を汲んでいる状態だ。そこで私はむこうの農林省に行つて末端の水路までサービスをしなければいけないと言うと、いや、そういうことは農民自身がやるべきだ。それが近代財政学のよいところだ…と、すましかえっている。(笑)

以上の点が非常に欠けている為に、折角立派なダムが出来、メインキャナルが出来ても、それが直接農業生産力に結びつかないところに一つの悩みがある。

森下 肥料の場合もそうです。肥料をやったことによって、もし倒伏したら、あまり儲けがないのじゃないか。それならやらずにおいて、

少々の収量でも儲かった方が良いといった考え方です。

安尾 ヒラクッドダムはどこの金で造られ、どの程度利用されていますか。

島田 インド政府の金で、1957年に出来ました。灌漑可能面積は大体38万エーカーということです。

西尾 日本の琵琶湖より大きい、すばらしいダムです。

島田 雨季は殆ど天水に依存しているので、ダムの水は主に乾季に利用されています。作物は落花生、米、さとうきびの三つ位で、今は落花生の反当り収益が割合多いので、パッケージプログラムあたりは落花生を随分指導しています。もともと畑作地帯であったから、米を作るような土地ではないのです。全然雨が降らない乾季に冬稲の栽培が非常に多くなった。私達が着手した時には、どこにも冬稲が見られなかったが、最近はずっと多くなっている。その普及率は素晴らしいと思う。

山田 あなた達の功績が相当実ったというわけですね。

安尾 遠くの方へは、水をどうやって引いているのですか。

島田 水はメインキャナルから出まして、それからサイドキャナルが出ていますが、それが農民自身で作った非常に粗末なもので、ざるに土を入れて掘りあげて作ったものですから直ぐ崩れるが、どことなく通して自分の方に持っていくといった現状です。

安尾 38万エーカーの内、どの位利用されているのですか。

島田 それはちょっとはっきり申し上げられないのですが、まだ半分はっていないと思います。

安尾 さとうきびを作る時は、10カ月位かかりますが、雨季にかかって水につかることはありませんか。

島田 大体高い所で作りますから。

安尾 そういう所に、乾季の灌漑はどうやっているのですか。

島田 矢張り水を持って行きます。

安尾 もっと本腰を入れれば、38万エーカーはともかく、30万エーカー位はいけるわけですね。

島田 いきます。灌漑水をうまく利用すれば、

山田 土水路だからロスが多い。だから農場だけでもコンクリート水路を作れと言って随分申し入れておいたのですが、出来ましたか。

島田 予算は貰っています。それともう一つは、インドは水があれば非常に良い所だということになっています。特に私の経験では、雨季の稲作よりも、むしろ乾季の稲作の方が増収率が高い。日照時間が非常に長く、意外なことには冬稲で夏稲よりも増収しました。夏稲で最高とって40マウンドいかない早生種が、冬稲で今年42マウンドとれました。結局ヒラクッドダムの水があるし、天気が良いのだから。ここで増産しなくては、食糧増産にならんのかなということをお話したわけで。

狩野 今の灌漑の件ですが、グジャラートに一つカカラダムがあって、その水は放水路から出る水の50%が利用されているということです。極端な例は、海に放出している場合がある。大体漏水が30%、蒸発が20%。日本に最近蒸発防止剤があるという話を聞いたが、見本でも送って、ダムに使って見たらどうかと…。

山田 あれは風が吹くとだめなんです。オイルのフィルムだから…。

島田 私はアメリカのカ州で6カ月ほど農業実習をしましたが、カ州も全然雨の降らない所です。ダムの水をうまく利用しています。1滴も海に流していないという農業を見せてもらった。ところが立派な施設のヒラクッドダムは、沢山の水が海に流されてしまっている。全然農地にしみ込んでいないのです。これが早く農地にしみ込むようになると随分良いのかなと思います…。

狩野 キャナルでなくて、土地のレベリングを何かの形でやらないと、1フィートの差がありますから、そこに水をまんべんなくやるとい

うことは出来ない。あれを政府で補助して、ダムの工事をやると同時にレベリングをやらないと、かえって作物に害を与える状態です。

島田 私の隣の農場は棉作試験場でしたが、今度面積を広げて300エーカーの灌漑試験場になりました。全インドで5カ所設置されました。そしてダムの水を如何に有効に使い、如何に作物を栽培してゆかかというポイントを試験する農場に4月から変わりました。

田中 水の問題では真剣になりまして、我々の10エーカーの農場にはみな流入口にゲージを付けまして、農場に点々と蒸発器を付け日本農場は1年間にどの位の水を使ったかを調査するわけで、朝から晩迄毎日365日、我々の農場に水を入れる時には、直ぐに係りに連絡して「今入れると」と言うので、1時間にいくら入れたかわかる。出す時はいくら出したかというように、水の問題は非常に真剣になっています。

佐藤 出す時にきまった場所から出ればいいが、大体今迄はねずみの穴から出ているのが多い。

田中 それだけ厳密な試験をやるのだったら我々の要求通り畦畔と水路をコンクリートで作ってくれということで、キャナルだけはコンクリートで作ってくれました。

森下 ナディア農場では3年ごしに水路を作れと、調査団が来られた時にも申入れたが、結局作らない。それで私が灌水係りになって、3年越しの約束を履行しないなら、こんな水路では水がロスになって、稲を作っても収支決算が成り立たないと行って水をやらなかったら、場長とスーパーインテントが困って、それに対して対策がねられて、パイプを集めてパイプの水路を作ろうじゃないかということになった。ところがパイプは来たが技術者がいないので折角インド側が頑張ったのだから何とかしなければいけないと思い測量して3日の間に500フィートのパイプを突貫工事でやった。はじめの内州政府は敵視していたが、いよいよ出来上り、まことに順調で、水門の一つ開いたら、これ迄1時間も2時間もかかったのが、30分で、

水が入る。そうすると「水路はこれじゃないといかん」という次第です。(笑)「これ迄ポンプ井戸を作るのに何千ルピー、何万ルピーも使ったのに、こんなに安く、立派な水路が出来るなら、これにかざる。ということでした。とに角、日本人技師は、稲作りだけでなく、道も作れば、水路も作るのだということをやったわけです。

加藤 揚水ポンプの大きさは、何フィート、何インチですか。

佐藤 井戸の深さは、500フィート、径6インチです

農機具の問題

奥野 今、農機具の話が出ましたが、肥料でも入りにくいのに農機具なんかはどうなんですか。

狩野 農機具は、農民達がつきあげて、インド政府は入れざるを得ないような状態になっています。

奥野 外貨を使っても入れるということですか。

狩野 その点はどうなっているか知りませんが…。

奥野 それで日本の農機具の性能、値段の問題なんかどうですか。

狩野 性能の点では自信をもってインド農民にすすめることができます。価格の面では日本製は余り差があり過ぎると思います。高いのです。

山田 しかし農機具は税金がかからんようになってるので運賃を除いたらそんなに高い筈だが。

狩野 いや、国内価格とインドで販売している価格が違う。グジャラートで5,600ルピーで売っております。

佐藤 マイソールでは5,000ルピー、37万5千ドル。

田中 5,000ルピー だったら、農民が直接買えます。

山田 おもしろいですね、はじめ農機具の話を出した時、インドは人口が多いのだから農機具はいらんという意見が農業大臣あたりに強かった。ところがそうじゃない。遊んでいる者はいるのだが。

奥野 それは労働力の節約というのではなくて、収穫が上がるということが目的ですが。

西坂 労働力の節約が一番です。

田中 農繁期になったら、労働者を雇い入れるのに大変です。

島田 それともう一つは、私の農場の隣ですが、10頭の牛をもって、5組の犂でたがやすと、25エーカーを耕すのに約1カ月かかって、田植が遅れてしまう。そこで、機械が入ると短期間に出来るということをしきりに言ってくる。

安尾 すると、5,000ルピーで飛び付いて買うような農民は、機械の扱いは大丈夫ですか。農機具の評判を落とすような使い方はしないでしょうかね。

狩野 それは問題です。恐らく大問題になると思います。私達としては、できるだけ暇をつつて、日本農機具の修理を引受けているが、今後は相当負担がかかってくる。

山田 商社なり会社なりが、訓練と同時にサービスもしてくれないと、あとで日本農場に相当負担がかかってくるのじゃかなわんがらね。

奥野 農場も、まさか日本の農機具がのたれ死にしているところを見ている訳にもいかんでしょう。

島田 実は私の農場の近くに政府の農場が2つあって、そこに2台づつ4台の耕耘機が入ったが、両方共故障して、久保田のサービス員が来ないから是非一つやってくれないかということで、出張してやりましたが、そういったことをしますと、とても業務と両方ですから。

田中 直接・間接にそういう機械を買う意欲をもやしたのは、日本農場で見て、良いということで買っ訳です。そういうルールを知らない人達は、機械が故障した場合に、直接日本農場にやって来る。

安尾 そういう、買える農民は何割位ですか。

田中 今の段階では、部落に2~3名ですから、3割位でしょうね。

奥野 それはどういう層ですか。

田中 相当大きな、30エーカー~50エーカーもった人達です。

奥野 それからさっきの日本製農機具の性能は推奨するに足るという話でしたが。あまり便利に出来すぎて、機械なんか扱ったことのない連中にかえて操作しにくいとかいうことはありませんか。

狩野 そこが一番大事なところじゃないでしょうか。もうちょっと簡単に動かせるような。

森下 機械を出すなら機械を生かすようなサービス員を出してもらいたい。軌道にのる迄の先決問題はサービスじゃないですか。

西坂 サービスの悪いのは日本の機械だけじゃなくて、特に私どもの場合は大学ですぐれたドイツの機械とか、イギリスの機械が入っていますが、それが動かずにほってあるのです。もちろん山川要員が二、三日行って、全部動くようにしてやりましたが…。ところがそういうことを1回か2回やると評判になってしまって、「あすこで自動車がとまっているから、ちょっと来てくれないか」(笑)と、修理工みたいになってしまうから、そういう印象を与えないように注意することが必要です。

狩野 サービスの悪い外国の商品は殆ど商業ベースで入ったものはありません。援助で入ったものは責任がないのです。しかし商業ベースで入ったものは、業者に責任をもってもらわんと困ります。

奥野 外国から商業ベースで入ったようなものはありませんか。

西坂 あります。ドイツが入っています。そういうものは完全なサービス網を持っています。

安尾 そうすると、そういう大型のトラクターと、日本製の耕耘機でいくやり方と、どの位の割合になる見通しですか。

田中 小型の方が大きくなると思います。というのは、インドは広いようだが個々の畑の面積は小さいので、あの大型では小回りがきか

ない。農民の声としては、絶対的に日本の耕耘機に限ると言っています。

西坂 日本の機械は水の中に入るといことが魅力です。

森下 それとインド人は体力がないので、小型、小型という傾向があります。大型トラクターは案外楽なんですけど、あんな大きなものを運転して若し事故でもおこしたらと心配しています。

田中 大型を買う人達は極く限られた地主階級であって、耕耘機となると幅が広いわけです。

山田 一挙にテラーまでいったが、日本の犁を大分推奨して、農事試験場でも研究していたが、あれはどうです。あまり入っていませんか。

田中 入っていませんが、あれはやる必要があると思います。

山田 試験場で大体やらせるところ迄行ったんですが…。これはつまり畜力の体系が出来ているんです。機械が入れば牛が遊ぶ。それで牛を殺せばいいかと言えそうじゃない。ポンプアップするの物を選ぶのも皆牛の力でしょう。だから牛による作業体系ができています。

奥野 2頭びきと1頭びきがあって、1頭びきにするには可成り調整がいるのですか。

田中 1週間でいいということです。

博覧会の時は3日間でやってしまったが、普通は半月位みればいい。

狩野 畜力専門の農場を作っても面白いのじゃないですか。

田中 最初の段階としては耕耘機を買えない人達は牛で一頭びきである程度収入を得る体制を作らせ、その次は耕耘機を買ったらいいと思います。

奥野 人力の連中をまず畜力に上げて、それから耕耘機と、2段階ということですね。

山田 日本が犁を研究するのではなくて、インドが犁を研究して、こちらがそれをどうサポートするかということになりますね。

収支計算の問題

安尾 農場発足にあたり、インド側は、農場で展示も結構だけれど、収支計算をはっきりやってくれと言われて日本側はとまどったわけですが、収支計算についてどういうふうに対処されていますか。

佐藤 収支計算はうるさいことはうるさいですが、インド側は畦畔、水路の修理、畦畔除草等は経費に計上しないことを了承し、肥料等の購入費、労働者の俸上費等についてのみ経費として計算しております。

安尾 わたくしどもは各農場から経営報告書を出してもらっていますが、3年間の協定期間も終了しましたし、ここで、インド農業施設4センターの効果について、整理しなければならない時期に来たと考えております。

佐藤 インド側も経営報告書を要求しています。スーパーインテグランドがやると同時に一つのデータに基づいて、我々も作成しておりますが、とかく両者に違いが起き易いので、私の農場では、スーパーインテグランドが経営報告書を書くことにして、今作成しているところです。はじめは何を使っても全部経費になって随分と苦勞しました。

田中 結局農場のインド側首脳陣のいかんによると思います。この点、今度のスーパーインテグランドのロイさんは内原で研修を受け、日本語も話しますし、そういう問題でも非常に自分の成績をあげるためにも農場を良くしたわけです。前の人とはとかく農場を故意に低く評価する傾向があり、トラブルも多かったのですが。

山田 農場収支については、経費等を統一すべきであり、このためには、経営の計算の仕方を中央政府と大使館とで、はっきりしてもらって、その線でやってもらうということが大切です。私も在任中は努力しましたが、まだ、はっきりしない点が残っております。

加藤 そうですね。インドの新聞に発表されている経営収支の支出項目には大低機械の減価

償却費や、日本側要員の給与まで入っています。日本側要員から提出されたものは、非常にすんなりした形で出てくるが、ファームマネージャーは州政府の要求からか、又、別の形で作成し、州政府に提出しているようです。しかし経営収支の問題は、昨年調査団が訪印の際、中央政府との話し合いにより、日本人要員の給与はもとより農機具や建物の減価償却、利子まで含めようとする中央政府案を全面的に否定し、演示に供する技術そのものについてのみ問題にすることにとどめ農場全体の収益性はとりあげないことにしました。

狩野 スラートでは農場設置当時のファームマネージャーはインドの試験場と兼務だったのですっきりいかなかったが、今は専任となり割合よくいっています。

田中 そういう問題で、私達のマイソール農場でもファームマネージャーが非常に非協力的で、レーパーの一番悪いのを我々の農場によこします。仕事は半分しかできないのに一人前として取扱っている。

山田 インド側ははじめはどうしても日本側のやることを見ていてやろうという気持がある。だから悪い条件をおしつけようとする。

森下 それに巻かれると駄目です。

佐藤 それからもう一つ疑問に思うのは、経営報告書を書くのはよいが、田植に幾らかかったと言われると、都会周辺のナディア農場あたりが2ルピー50とか2ルピー70かかったとしても、サンバルプールでは2ルピーとか1ルピーで、米の値段は皆同じだから、そうなると支出が多くなり経営収支が悪いことになります。

山田 それは仕方がないでしょう。

西坂 うちの農場は指揮系統がはっきりしています。最初はごたごたしていましたが、経費についてはファームマネージャーが一人でやっています。

山田 島田さんのところはちょっと問題がありましたね。

島田 実は農場は10エーカーありますが、25エーカー以上の農地でないと、州政府の規約と

して農場専属のファームマネージャーをおけないという事で、私達の会計関係は隣接の綿作試験場長がこれを兼任するという事になり色々問題が起ったわけです。

山田 それについては中央政府から指令を出させたいけれども駄目だったですね。

西坂 バパトラは、日本農場についている予算はファームマネージャーの権限で支出出来ません。それ以外の金を出す時は、上に相談するという事になっています。バパトラのファームマネージャーは役人としては下のクラスですが銀行のチェックをもっております。そして今日100ルピーいると言えば直ぐおろしてくれる。

田中 マンディアの場合も1万円でも2万円でも必要なだけ使ってくれとっております。

西坂 インド側が負担する農場運営費は新設農場の場合、当初の通常経費として、7,500ルピーを下回らない額を供与することになっておりますが、大体1エーカー当り、7,000ルピーということになっています。アンドラプラディッシュあたりは金を持っているせいか、1万ルピー出しています。

山田 それはたいしたものですね。しかしあまりそれに乗って金を使いすぎても、あとで困る事にもなりますよ。

田中 インド側は予算を大きく出しても、その結果に大きな期待をかけているわけですから、それだけ私達としても、立派な成果を挙げなければならぬわけです。

島田 大体私の農場では、夏稲、冬稲の総収入が9千ルピーから1万ルピーですから、完全に純益は出ております。今まで経費の計算についていろいろ話が出ましたが、何時も耳にすることは日本稲作法は金がかかるということですが、ここで問題は、金はかかるが純益が多いのだぞということは今後示すのが問題です。今迄私達は3年間やってきましたが、面積当りの収量を如何に高めていくかということを見せるために努力して来ましたが、今後は経費を切りつけて如何に利潤を多くするかについてデモンストレーションするよう心掛けるべきではないでしょ

うか。中央政府の役人がいろいろ視察に来ますが、今迄はいちおうどれだけとれたか、どうい様式でやってきたかといった質問が多かったが、最近、経費はどれだけかかりますか、どれだけの米をとるのにどれだけの支出をしていますか、というような質問が出てきました。これはセンターの行き方に対する一つの見方だと思います。

山田 それはセンターの一つの役割でもありますね。

田中 トライアルの期間の3年間過ぎたら当然そこに落着くのではないのでしょうか。

生活環境の問題

奥野 最後に皆さんの生活の問題ですが、日本人が現地に行った場合、あまり生活程度を下げすぎてもいけないし、といって農業センターの場合欧米人などの現地の生活態度も技術の普及という面から問題があるのではないのでしょうか。又、現実の生活上いろいろ不便もあると思いますが、そういうお話も伺いたいと思います。

山田 生活の不便という問題はあとで話していただくとして、生活水準をどの程度におくかという問題ですが、今迄アメリカの技術援助が不成功に終わったというのは、金をかけすぎたということです。しかし現実に平和部隊でやっている連中の中には、生活をぐっと落としてやっている人もいますので、日本人達もお高くとまっていたはいかん、地みちにやらないといけない、ということですが、皆さんの現在の生活程度は適当ではないのでしょうか。1国の技術者を代表して発言すると同時に、一農業専門家として、泥にまみれて、働くこともある。住宅は一般農民より立派ですが、大使館や商社の人々よりは落ちるということで、丁度いいのではないか、少なくとも現地人に正當に評価される程度の生活は堅持していると、いえると思います。

奥野 皆さんの現在の生活程度は、大体今のところがいいですか。

狩野 今が限度で、これ以上、上ったらいけないと思います。

森下 個人差、農場差、地域差等いろいろあって、いちがいには言えないところもあります。

田中 農場と生活は二つに区切って、生活の面はある程度上げてもいいと思う。しかし生活が高いからといって、農場に行つて背広を着ておさまっているはいけません。

山田 私が丁度良いと言つたのは、専門家として丁度良いということで、家族の人達は別です。奥さんお子さんには、エアコンや冷蔵庫等を備えてあげるべきで現地の農民の生活に何も近付ける必要はないし、お子さんには立派な教育を受けさせるべきです。しかし農業専門家としては現在の程度が丁度良いのじゃないかという感じです。

狩野 彼等とかけ離れた生活をしていても、彼等がスムーズに入ってくれるような雰囲気を作ることが大事です。

奥野 それはありますね。だから自分で垣根を構えてしまつては、いくら上げてても下げてても、程度の問題とは別でしょう。

森下 日本側は今回の新設は10エーカーという線を出されたことは、全くデモンストレーションの面積としても適当じゃないかと思ひます。私達のところのように25エーカーという大面積では、要員が年中働いて、ある程度エンジョイしたいと思つてもやはり仕事を中心になつて家庭を省みる暇がないのでやはり10エーカーという線を出していただいた方が、デモンストレーションの効果が上がるし、生活もエンジョイ出来ると思ひます。

山田 ナディア農場については特別に州政府から、「どうしてもあれだけやってくれ、農場を分けることはできない」ということで、それでは全部やめるかということまでいったという事情があつたのです。

森下 新要員の方が来られたが、荷をほどく暇もなく朝から田植で、そうなると家族の方が気の毒です。

田中 義務を果たすために仕事を十分やると、生活の面に多少支障をきたすし、特別の農場だからということで、垣根を作つてしまつては、仕事をやつても十分効果を現わさない。また僕達は1日の作業が終つてから、5時以後にまた明日の計画をやる。その内、話はずんで夜までもちこすので、少し家のことも考えてくださいと文句を言われました。

森下 ナディア農場の新要員の人達は日本側がよく選んでくださったので、全く仕事の虫が集まりました。

新要員の方が頑張つてくれるので、やれるという見通しがついたけど、これは無理を通したのであつて、やはり、私生活が多少犠牲にされたと思ひます。

今後に望むこと

山田 私のいたところから、日本人要員のオーバーワークを避けるために、インド側要員にカウンターパートになり得るような人をいれ、それによつて後継者も養成すればと度々注文を受けました。なるべくそういう形にもつていった方がいいのじゃないかと思ひます。

森下 理想としては全くその通りです。

狩野 3年目になると10エーカーでも広い位です。5エーカー位で…(笑)、いや、仕事をしないということではない。農場の運営に追われて、周囲に普及する余裕がないのです。

西坂 3年目になってくるとインド人の教育を受けた連中2、3人に経営させてみる位にもつてゆかないと…。

山田 少なくとも後半に入ったのだから、そうしないと後継者が出来ないのではないでしょう。

森下 これが問題です。実際そうしてやりたいたが、御存知の通りの国ですから、こちらで最も良いと思ふ方法を指示しても、なかなかかはかどらない。

山田 この点を良く考えないと、折角の今までの努力が雲散霧消するかも知れない。

森下 本当ですね。3年もたったのですから、ある程度インド人のカウンターパートと相談して、インド側に肩代りさせながら日本人が退いていく方法が最も望ましいと思います。しかし、それが仲々むずかしい問題です。

山田 無理でない方法で、そういう方向にもっていくよう一つここでお願いしたい。

奥野 現地の事情は、内地で考えているのは大分違う。しかし、方向としては、今のお話のようにもっていききたいものです。

なお、日本国内での研修に、センターのインド側要員を招くことは、最優先的に考えておりますが、目的とする人が来なかったり、遅れて来たりして困っております。今後、向う側要員とくに後継者の国内研修については、州政府と

も予めよく相談して御協力いただきたいと思います。

閉会のことば

奥野 長い時間いろいろありがとうございました。作業に有益なお話で、私共内地でもいろいろ考えはしますが、これはあくまでも内地の机の上で考えることで、現地のナマの声をうかがうことが、我々の仕事を今後進める上で如何に大切かということは、今日のお話でも痛感されました。私どもも大いに努力いたしますし、皆さんにも、今後とも御尽力をお願いいたします。

(8月10日 海外技術協力事業団会議室にて)



